

第3回滋賀県多職種連携学会研究大会報告書

学会テーマ：地域共生社会に向けた自立支援

開催日時：平成30年11月11日（日）
開催場所：滋賀県立大学 交流センター
学会長：越智 眞一（一般社団法人滋賀県医師会 会長）
実行委員長：清水 和也（一般社団法人滋賀県病院協会 副会長）
参加者：154名

開会式 学会長挨拶

基調講演（スカイプにて講演）

「地域共生社会に向けた自立支援とは」

講師：熊谷 晋一郎 氏（東京大学 先端科学技術研究センター）

座長：麻生 伸一 氏（滋賀県医師会）



（感想：参加者アンケートより一部抜粋）

興味深い話だった。専門職—当事者—家族で支援体制を完結することにより、マイナスに事がすすんでいく可能性がある事が印象に残った。

貴重な内容の話が聞けてよかった。特に加害者、被害者が互いに社会的に排除されている存在であるということが印象に残った。

何かにつけ個人の問題に帰着しがちな視点をやはり社会の社会＝自分という事が明快に分かった。依存の話もよくわかる。

企画演題 「子どもを中心とした地域づくり」

発表者：幸重 忠孝 氏（幸重社会福祉事務所 代表）

日比 晴久 氏（特別養護老人ホーム カーサ月の輪 施設長）

座長：市川 忠稔 氏（滋賀県健康医療福祉部 次長）



(幸重氏)



(日比氏)



(市川氏)

(感想：参加者アンケートより一部抜粋)

子どもを取り巻く環境が変わる中で、様々な取り組みが進んでいる事を始めて知った。分野をまたいだ活動が今後も広がっていけばよいと感じた。

「出来ることから実践」できる人が地域を変えていくんだなと思った。

子どもや親を孤立させないということを具体的には実践で説明して頂き、子どもに寄り添うことの必要性についてよく分かった。

特別講演 「データから見る地域共生社会」

講師： 免田 圭介 氏 (社会保険診療報酬支払基金)

座長： 清水 和也 氏 (滋賀県病院協会)



(感想：参加者アンケートより一部抜粋)

自分の担当分野のみで解決しようとするのではなく、他機関との連携の重要性について改めて気づかされた。

困りごとを抱えた人をいかにするかが今後の課題になると思う。一層の地域づくりが必要。

作業所販売

- 社会福祉法人 ひかり福祉会 工房ふれっしゅ
- 社会福祉法人 きぬがさ福祉会 おうみや
- 社会福祉法人 滋賀県聴覚障害者福祉協会 びわこみみの里



表彰式

《学会長賞》

演題番号9 リハ職派遣による施設サービス及びケアの質の向上をめざして
～生活機能向上支援事業～

滋賀県介護老人保健施設協議会リハビリテーション部会
リハビリセンターあゆみ 深津 良太 氏



閉会式

演題発表

分類	座長	演題番号	演題および筆頭演者
多職種連携	滋賀県 保健所長会 山下 剛	1	地域における多職種連携の会が実際の在宅介護現場で及ぼす影響 一般社団法人 彦根薬剤師会 池田 富美子
		2	自立支援会議での長浜市の取り組みについて 長浜市高齢福祉介護課 大塚 宏未
		3	多職種による自立支援へのアプローチの可能性 ー日野町の地域ケア個別会議の取り組みを通してー 日野町長寿福祉課地域包括支援担当 坂田 敦子
		4	多職種共同による食事支援の取り組み 介護老人保健施設アロフェンテ彦根 佐々木 恵
		5	2時間でどこまで伝わるか～セラピスト対象の薬剤の知識と注意点 に関する研修会参加者アンケート結果報告～ 医療法人社団阿星会甲西リハビリ病院 薬局 酒井 孝征

(座長コメント)

自立支援会議を長浜市では自立支援のためのケアマネジメント支援を目的に地域ケア会議として開催されている。委員として医療関係者、介護関係者、行政等多職種が参加し連携が図られているものとする。その中で自立支援のイメージを視覚化することに取り組み、試行段階とも思われるが、H29とH30の比較で「地域とのつながり」や「役割・楽しみ」では改善との評価が出ている。さらに「生きがい」のレベルについても工夫していることがうかがえ、今後さらにブラッシュアップした評価指標がつけられることに期待する。

分類	座長	演題番号	演題名および筆頭演者
地域共生社会	滋賀県社会 福祉協議会 猪飼 立子	6	ホースセラピーを中心とした多職種連携について ～放課後等デイサービス PONYKIDS の活動報告～ 放課後等デイサービス PONYKIDS 山本 妃呂己
		7	特別支援学校における連携について ー理学療法士からの考察ー 滋賀医療技術専門学校 分木 ひとみ

		8	地域共生社会構築の一翼を担うリハビリテーション専門職の人材育成を目指して 一県での取り組みからの考察ー 滋賀県立リハビリテーションセンター 高松 滋生
		9	リハ職派遣による施設サービス及びケアの質の向上を目指して ～生活機能向上支援事業～ 滋賀県介護老人保健施設協会リハビリテーション部会 リハビリセンターあゆみ 深津 良太

(座長コメント)

リハビリテーション専門職人材が、所属する機関のみならず、地域にあるさまざまな社会資源と関わり、持てる専門的力を発揮している、またさらに発揮していこうとする実践は評価できるものだったと思う。地域共生社会とは「誰もが排除されず、その地域に頼れる人ができるだけ多くいて、安心して暮らせる社会」であるのではないかと考える。

それぞれの実践が、対象者の生活の場での人と人との関わり形成において果たす役割が意識され、さらに、「誰もが」に対してアプローチすべきことがないかを、今の実践を通じながら模索し、広げられることに期待したい。

分類	座長	演題番号	演題名および筆頭演者
事例検討	滋賀県作業療法士会 鈴木 耕平	10	退院直後よりリハビリを開始しADL向上に繋がった症例 ～症例を通し通所介護の役割を考える～ 株式会社スイッチオンサービス デイサービススイッチオン竜王 高橋 一馬
		11	慢性疼痛により動作・活動不安の強い利用者への作業療法 医療法人弘英会 さくらテラス（通所介護） 亀谷 恵里加
		12	多職種での情報共有により社会参加に向けての目標が明確化した 若年性ギランバレー症候群の一症例 近江八幡市立総合医療センター 中川 響
		13	コミュニケーション支援のために家族支援もあわせて行った事例 NPO 法人滋賀県社会就労事業振興センター 松下 佑太

(座長コメント)

デイサービスにおける取り組みを通じた理学療法士・作業療法士からの演題では質の高い在宅生活の継続に着眼した発表であった。特に身体機能から活動へ、また活動から心身機能への良好な波及があった内容であったと感じた。またギランバレー症候群を持つ人への社会参加に向けた取り組み

みでは多職種や就労現場のスタッフも関与した内容であった。対象者から次なるステップの希望が生まれた関わりからも本人を巻き込んだ綿密な関わりであったことが伺えた内容であった。演題 13 では意思伝達装置の提供に関わる職業指導員の立場からの考察であった。特に道具提供を「単なる物の提供」ではなく何を繋ぐ道具なのかを十分に検討する必要があると再認した演題であった。

分類	座長	演題 番号	演題名および筆頭演者
学生 セッション	滋賀県 栄養士会 小澤 恵子	14	精神科病院での臨床実習を通して多職種連携を考える 滋賀医療技術専門学校 勝見 章太
		15	ゲル化剤使用基準の比較検討 滋賀県立大学 向 樹里子
		16	頸部聴診音による嚥下評価指標の検討～健常高齢者との比較～ 滋賀県立大学 橋本瀬菜

(座長コメント)

学生らしい、新鮮な視点で捉えた発表だったと思います。演題 14 については、それぞれの専門性の中で、対象者とどう関わり、何を優先するかについて職種間の相違点を冷静に見極め、理解と信頼に向けて積極的に取り組みたいという思いの伝わる発表でした。演題 15・16 については、在宅医療の進む中、誤嚥性肺炎という避けられない問題について、食事提供の視点・評価の視点と2つの方向で発表されました。提供する食形態については、誤嚥を防ぐ最も重要な要素です。素人が関わる在宅介護において、誤嚥の危険をいかに回避するか、在宅における栄養管理の参考になる発表でした。研究の半ばである演題 16 については、高齢になることで嚥下機能の低下が見られることが客観的に証明された発表であり、高齢者間での誤嚥の早期発見に、新たな指標を期待したいものです。

分類	座長	演題番号	演題名および筆頭演者
調査・研究	滋賀県理学療法士会 森 智子	17	滋賀県内における循環器疾患患者のリハビリテーションに関する実態調査<介護保険分野への普及を目指して> 近江八幡市立総合医療センター リハビリテーション技術科 奥村 高弘
		18	大腿骨頸部骨折患者の自宅復帰に影響する要因について 公立甲賀病院 リハビリテーション課 小倉 正和
		19	バランスパッドを用いた立位足底知覚トレーニングの立位バランス機能改善効果における脳機能評価 滋賀医科大学精神医学講座 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科 松野 悟之
		20	発達障害専門デイケアができること ー自己肯定感意識尺度の変化・利用者アンケートから地域共生社会を考えるー 滋賀県立精神医療センター 渡部 良子

(座長コメント)

演題 17 では、循環器疾患リハビリテーションにおける医療と介護の現状と課題をアンケートを通じて分析され、地域の中で循環器疾患患者が安全に生活できる今後の取り組みについてまでが述べられており、地域での活躍されることを実感しました。

演題 18 では、頸部骨折で入院となった患者の退院時の機能を精査し、先行研究には有意差が認められている認知症は。今回の調査では有意差が認められず、地域課題として施設の不足・経済的問題があるのではないかとということが示唆されていました。

演題 19 では、理学療法としての立位知覚トレーニングにおける近赤外分光装置を利用した脳血流量の測定を行い、足底からの感覚トレーニングが頭頂連合野を活発にし、前頭前野への影響が示唆され、今後の患者活動性に足底感覚刺激を利用した立位バランス訓練の有効性が示唆された。

演題 20 では、発達障害専門デイケアでの取り組みが発表されたことは、今大会が始めてであり、成人期を対象としたデイケアの発達障害専門プログラムの存在やデイケアの有効性が述べられた。現代の社会的な課題と認識されている取り組みの紹介は、今後の発展につながる第一歩であると感じた。

分類	座長	演題番号	演題名および筆頭演者
多職種連携	滋賀県 看護協会 草野 とし子	21	看護小規模多機能型居宅介護で働いて ～作業療法士としてのかかわり～ 看護小規模多機能型居宅介護 友愛の家ヴォーリス 戸田 利嘉子
		22	現状のケアを変えていこう！ 「ひとにやさしいケア」の活動報告 近江八幡市立総合医療センターリハビリテーション技術科 原田 昌宜
		23	「つい手に取りたくなる」申し送りの試み ～認知症をもつ人の「その人らしさ」をチームで支え続けるために～ 医療法人恒仁会 近江温泉病院 多田 真理子
		24	家族からの支援が望めない認知症高齢者をケアマネージャー、 通所介護と連携して服薬支援を行っている事例 どんぐり薬局近江店 増田 登美子

(座長コメント)

- ① 会場が、受付と同じエリアであったことや、中央にテーブルのある場所であったこともあり、多くの方が、参加していただいた。
- ② 各報告は、様々な連携に関する報告で、内容も、多職種による支援事例や新たな評価の試行、多職種への研修の実施など、多様な取り組みを報告され、興味深い内容であった。
- ③ ご質問をいただくことで、内容の深まりが出ていたので、もう少し多くの方から質問をいただくような進め方をすべきだったと反省しています。
- ④ 報告終了後に、個々に質問されている場面もあり、ポスターセッションならではの光景であり、ポスターならではの良さが出ていたと思います。

